も此の生命は現在から我等の所有となるのである。我等が神の召を蒙むりて其の子となるや、其生命は我等の心中に發達し始むるのである。即ち此の生命は神を識るに依りて顯はれる生命である。神と交通し、融合しうる生命である。かくて天父に祈る心、眞理を瞑想し、憧憬する心情、善を追及する精神、義を慕ふ念、愛を實行する念などは悉く此の生命の表現である。

實現するに必要なる條件　先づ我等に必要なことは神につきての知識である。由來眞神を知らんとするは人心自然の傾向であり又大願望である。實に神は人心の對象であり又到達すべき目的である。人心は神を慕うてやまぬ歎を以てゐる。『我等に父を示し給へ、左れば足れり』とは古今の人心を表彰して居るのである。そして神を識るの方法多々あらんも、最良の手段はイエスに由りて神を認むることである。肉體となりて我等の中に宿れる『道』こそ最良の方法である。ローマのバチカン宮殿の天井に或る名畫が描かれてゐる。左り乍ら何人も肉眼を以て之を認むることは出來ない。必ずや之が爲に備へてある一個の反射鏡を借りなければ鮮かに認むることが出來ないと云ふことである。斯樣な理と同じく

我等はイエスを通さなければ鮮かに神を認むることは出來ないのである。

そこで『知る』ことは信賴すること、愛敬すること、仰視すること、畏虔すること、實際の儼存を意識すること、恒に我生涯を新にし、かつ交はつて指導し居ることを意識すること、將たイエスが我を捕へて居ることを悟ることなのである。そして我等は服從することを以て之を證據立てねばならぬのである。『われ彼を識ると言ひて其誡を守らざる者は謊人なり眞理その衷に在るなし……彼に居るといふ者は彼の行し如く行むべきなり』（約壹書二〇四）とあつて彼の意志と我が意志との一致を要求して居る。曾て聖フランシスの弟子マセヲは師父と共にフローレンス、サイナ、アレゾー方面、孰れにも通じて居る十字街頭に立ちて、往くべき方向に困惑し、マセヲは『父よ、我等は孰れの方向にゆくべきか』との問を發せる時、フランシスは『神の望み給ふ途へ』と答へた。するとマセヲは『いかにして我等は神の意志を知るべきか』と問ひければ『我は汝に之を示さう。私が其處よと汝に告ぐる迄、停止せずして途をぐる〳〵回轉せよ』と命じた。マセヲは仰に從つて幾回かころび乍ら其の命に從つたが、やがてフランシスは自分に面せるマセヲに向つて『止れ、

動くな』と命じた。暫らく立ち止りてのち、フランシスは『汝の顔は何處に面するや』と問ふに對し、『サイナの方へ』と答へた。此に於てフランシスは『我等は今日サイナに向うて往くのが神意である』と云つた物語がある。實に神意に服從することは古今聖徒の採るべき途であると謂はねばならぬのである。

知ることは又似通ふことなり　甲の聖徒を乙の不信徒が諒解の出來ぬ譯は互に似通うてゐる所がないからである。喜は喜の人に知られ、知は知の人に認められる丶。其人を知ることは其人の如くあることである。故にイエスを知るにはイエスのやうにならねばならぬ。『永生』とはキリストを知ることなり』彼を知りて其生命を分ちうべく、彼に由りて之を支へうる。即ちイエスの生命は永遠であり、永遠の生命はイエスの生命である。要するにイエスに由て神を知り、そしてイエスに似る者となることである。此處に眞の生命があり、不朽の生命がある。

第卅八講　境遇と品性（約十七〇十五）

世を去りし後を慮りて　イエス世を去らんとする前、自分の周圍に群がれる門弟達の前途を慮りて祈れる言葉が、乃ち『われ爾に彼等を世より取りたまへといのらず唯かれらを守りて惡に陷いらす勿れと祈る』となつて表はれたのである。さてイエスは『世』なる言葉をいかに意味し給ひしやといふに有爲轉變の世の中、是非、善惡、迷悟、正邪、明暗の爭ひ居る世の中。即ち實務家、政論家、事業家、總ゆる一切の人類が富と名とを競ひ居る舞臺を指すのである。そしてかゝる錯雜な世の中から所謂る『物怖ぢする鳥の如く衆目から遠く距てた閑靜な世界に巣喰ふものであるから、私は喧騷の場所を好まない』といつた印度の一詩人の理想のやうに、退隱することではなかつた。即ち世の中から遠く距たつて仕舞ふことでなく、唯だ世の中の惡から離るゝことを祈り給うた次第なのである。

往古、或る敬虔の徒は此世間を放棄し、遠離して人煙稀なる山間の洞窟や、閑寂な境地に向つて其住家を求めた。かのアナトオル・フランスの『タイス』の中に描いてある隱者

のやうに、シリヤの杜隱者たちは野に立つてゐた柱の頂上に永い年月の間、端座して居たのである。此種の中にて最も名高き者はシリヤの一寒僧シメオンであつた。シメオンは幼時羊牧をしてゐたこともあつた。彼は青年時代に於て九年間シリヤの一洞窟に默座して、之から一歩も外に出たことがなかつた。しかし乍ら彼は斯る生涯に於て滿足し難きことを見出して、自ら新しき懺悔の方法を案出した。そこで彼は紀元四百二十三年の頃アンテオケに近き山奥に退きて自ら立てた柱の上に生活したのである。元より柱の頂きは四尺餘方の廣さを有して、落ちないやうに欄干なども備へてあつた。彼は此處に三十年間餘を送つたのである。彼は獸物の皮をまとひ、そして頸には鐵の頸輪をつけてゐたのである。彼は柱の下に群がり來る民衆に向つて日毎に二回の說敎を試みたのである。かくて彼は七十二歲の齡を以て其柱の上に往生を遂げ、アンテオケに於て莊嚴な葬儀が營まれたと傳へられてゐる。テニソンは彼を『セント・シメオン・スタイライツ』の詩題で彼を歌つてゐる。しかし乍らかゝる隱者の生活は、所謂『惡』より離れたのでなく、『世』を遠ざかつたのであつて、固よりイエスの精神ではなく、活けるクリスチアンの模範でもないのである。

世に處することば自他の爲めなり　我等は先づ自分のために此世間に處してゐる。即ち我等はより聖き、より高き生命を造るべき訓練のために此世に置かれてゐる。此世に於ける或時と或場合とは我等の品性をイエスの品性に似通はさんために、神の像に肖せんために必要な條件である。

イエスが此世に現はれ給うた次第は人類のためであつたことは謂ふまでもない。かるが故にイエスは父に向つて此世より弟子達を取り給へとは祈り給はなかつたのである。イエスは此の事を次の節に於て、即ち『なんぢ我を世に遣はし、如く我も彼等を世につかはせり』と言ひ給うた。我等はイエスが此世のために遣はされたことを諒解してゐる。即ち世の光たる爲であつたことを認めてゐる。斯樣にイエスの民も亦世に對して使命を帶びてゐる。故にイエスの民はイエスの歩みし如く歩まねばならぬのである。パウロは『されば兄弟よ我神の諸の慈悲をもて爾曹にすゝむ、その身を神の意に適ふ聖き活る祭物となして神にさゝげよ是れ當然の祭なり』と謂つて聖く且つ生くることを勸めてゐる。惡を遠離して聖きものたると同時に、此の世間に活動する者たることは我等の理想でなくてはならぬ。

惡とは何ぞ　ヨハネは『惡』を習慣的に人格化してゐる（約壹書三〇十二、五〇十八、十九）しかし乍ら此の人格化せる惡が果して人生の貧の中に、肉體の苦痛の中に、其の死の中に、一種の形式をとつて現はれたと思惟せしや、或は唯だ單に習慣的に之を呼稱せしやは判然たらざるも、而もイエスの我等の爲に祈り給うた者は外形的の惡に非ずして內的、精神的の敵である。即ち吼ゆる獅子の如く我衷に彷徨ひ廻る所の仇敵の爲である。尙ほ之を換言すれば我等の靈性を滅亡に導く所の現世の快樂及び神の愛より我等を引き離さんとする所の地上の誘惑、妄想などから自由に生活せしめんためである。

境遇は何處に在りや　イエスの祈は世界から引き出し給へといふに非ずして惡から禦ぎ給へといふのであつた。即ち救は肉體の異動、變動によりて起るものではなく、而も聖靈の保護、防禦によりて來るのである。我等の救は土地を轉じ、住所を移す所に非ずして心の狀態を一轉する所に存する。イエスの目的は我等を聖となす點にあつたのであるが、而も外界の障害物から遠離せしむることでなく、恰も强烈な健康狀態にありて一切の病魔に抵抗しうる如き力を有せしむる所に存してゐる。弟子達を鼓吹し、奬勵し給うた理想は誘惑

や、試練のない境遇に於て無邪氣に生きよとには非ずして、反つて錯節盤根に耐へて、之に打ち勝ちつゝ『聖』を完うせよと謂ふのである。『爾曹世に在ては患難を受ん然ど懼るる勿れ我既に世に勝り』とは、イエスの今に至る迄我等を屬し給ふ御聲である。イエスは或る魔術を以て我等を救ひ給はず、聖靈の力を以て我等を强め且つ聖め給ふのである。實に我等の大祭司なるイエスは我等が試練に遭はざるやうにとは祈り給はず、而も試練に屈服する所なく向上し、進歩せよとの御聲を給ふのである。

第卅九講　主の聖別（約十七〇十九）

イエスは潔めの源泉なり　人類が此の世にて認めた最も圓熟せる、最も完全な生活はイエス・キリストの生活である。何人もイエスの如き堅固な確信と泰然たる平和と豐富な恩惠とに充ちて世に現はれたものはない。そこでイエスの歩を抂げて到處に惠と助とは溢れて居たのである。即ち彼の衣の裾すら一種の靈力を有し、其慈眼から、其唇から、其手から、其愛腹から、斷えず人類の魂へ限りなき靈の賜物が注ぎ込まれたのである。此の世界に於て、いかなる人物よりも、多量に力を蓄積せるイエスは、いかなる人物よりも、又多くの惠を人類に分與し給うたのである。蓋しイエス自身全く潔められ給ひし所に、其秘義を藏して居るのである。

潔の働き　此の潔の意義は聖書中二樣に使用せられてゐる。即ち舊約に於ては特別に備ふる、聖別する、捧ぐるなどの意義を表はし、我等は普通之を聖と呼んでゐる。元より『聖』と『潔』とは同一である。潔は基督信者の品性の完全に生長すること及び個人の生

活の高めらるゝことであるが、新約聖書には此の意味にて使用されてゐる。簡明に之を言へば、潔はクリスチアンライフの目的と其道程との双方を表はしてゐるのである。そこで全き潔は全き聖となるのである。

如上の潔めはイエスの全生涯の目的であり、弟子たちに對する希望と祈禱とであり、又我等に對する理想である。即ち潔むることは神と人類とに對して特別に備ふること、聖別すること、献身することである。又思想と實行とを聖め、かつ動機と行爲とを献ぐることである。尙ほ之を換言すれば、我等は日毎の生活に於て、進むも、退くも、出るも、入るも、將た勝利の時も、試煉の際も、神に近づいてゐること、又我等は主の榮を我等の生活に於て、品性に於て發揚すること丶なるのである。

潔めの目的　『自己を潔む』とは贖罪事業の出發點にて、『彼等の爲め』とは目的にして社會奉仕の精神を含んでゐる。即ち個人に始まつて社會を目的としてゐる。良き世界を造る第一歩は自己を良きものとすることである。即ち先づ品性を造つて後、義となり、愛となるのである。斯くの如きは則ちイエスの歩み給ひし途であつた。元よりイエスは社交的

方面の組織者若くは改革者として史上に立たざりしも、全人類のために献げた社會奉仕の實際家、實現者として著しく史上に顯はれてゐるのである。畢竟神の王國は他人のために自己を潔めて勵むところから顯はれて來るのである。

曾てデビッド・リービングストンは知識を獲ること、自分の魂の淨化せんことを熱望した。彼は天文學者たり、化學者たり、植物學者たり、そして地理學者たることを欲うた。彼は陸地を測量し、家を建て又船をも操つたこともある。彼が英國に於て認められた時、いかなる喜悦を有つたであらうか。何故に彼は認めらるゝ丈の價値を有せしやといふに、暗黑なるアフリカを開拓せるがため、同民族に仁惠的援助を與へたがため、更に彼等の心靈を潔むることが出來たゝめであつた。彼は更に自己を潔めた。然り暗黑なる大陸の要求を深甚に感じた彼は、より多く眞理と力と潔とを有するに至つたのである。一日早朝彼の僕等はリービングストンが寢床の傍に跪き乍ら永き眠に就ける悲劇を見出したが、其瞬間彼等は私心私慾なく實際他人のために身を献げて全く聖別せられた彼の生涯に感動せしめられずには居られなかつたのである。

近世佛蘭西の史家アウガスチン・ラエリーは、ゼルマン民族の起原及其他の史蹟を研究せんがために、自ら社會より退隱して六年間餘念なく大半蟲に喰ひ盡されてゐた原稿に眼を曝し、遂に堂々たるかの『勝利の歴史』を完成せるが、悲いことには失明の人となつた。彼の視官は史蹟追及のために犧牲に捧げられたのである。しかも彼は失明後一友人に送れる書簡に曰く『私は今一度私の生涯を繰返しうることありとするも、今の境遇に導びきし此の途を改めたいとは思ひませぬ。私の目の見えない此の不幸は、私の問題とする所ではありませぬ。世界には快樂よりも、幸福よりも、健康其物よりも、更に〳〵尊き或ものが存して居ります。私は大なる目的に向つて全力を打込むこと、又自己を捧ぐることは如上の條件よりも尊きものであると信じます。此處に學術的研究よりも一層高き目的がありますと。そして其目的に向つてイエス・キリストは其身を捧げ給うたのです』と。かゝる確信や味ふべきである。

潔めの手段　眞理は偉大な潔むる力である。そして曾て人の心を照らす眞理の光にして父なる神から顯はれない所の光はないのである。實に我等を潔むる所のものは假の光や、

贋物や、僞り物などではない。永遠に亙りて動かざる眞理及び之れより顯はる、光は神の祝福に他ならぬのである。神の眞理及びイエスの眞理、即ち其事業、愛、忍耐、謙遜及び聖靈の働きは我等を潔むる力である。神の眞理は恰も空氣の如き働きをなして信ずる者に呼吸を與へ、生命を與へ、力を與へる。實にキリスト自身が眞理であり、彼より眞理顯はれ、そして彼に觸るゝものに啓示があり應驗がある。此は眞理と我との交はりによりて實現せられ、確證せらるゝ。其働は單に我等を支ふる力のみではなく、しかも我等の貌を化はらしめ、聖からしむる魔力を有つてゐる。『兄弟よ、爾曹の德を建て且凡ての聖められし者の中に於て業を與る能ある神及其恩惠の道に今われ爾曹を委ぬ』(徒二十〇三二)とは理ある言葉である。

第四十講　我が王國（約十八〇三三―三六）

ユダヤ人等の期待に反せる王國　余は本講を講ずるに當り、一應王國の觀念に關する歴史的研究を擧げて見たいのである。當時神の國は何時きたるかとのパリサイ人の問に對してイエスは『神の國は顯はれて來るものに非ず。此に視よ、彼に視よと言ふべきものにも非ず、夫れ神の國はなんぢらの衷にあり』(路十七〇二十、二十一)と答へ給うた。そして自ら『期はみてり神の國は近けり、爾曹悔改めて福音を信せよ』(可一〇十五)と宣ひ、又ユダヤ人等がイエスを執りて王となさんとするを知りたゝ獨りにて之を避けたとの記事もある(約六〇十五)。しかるにイエスが『神の國』てふ言詞を使用せる所以は、曾てイスラエル民族の宗教的及び社會的期待に關する王國の觀念を採用して、そして自己の王國、所謂る『我國』の擴張、宣傳のために使用し給うたのである。そこでイエスがいかなる精神と關係とを以て此の世に立ちしかは、イエスの王國のいかんを了解することによりて自ら炳焉なる次第なるが、畢竟するに神の國、イエスの王國はイエスが理想の具體化し、人格

化したものと認めらるゝのである。

由來イスラエル人の王國觀念は遠き過去よりイエスの時代迄傳承されてゐた。當時民衆の記憶と想像に宿りし過去の理想時代は、恰も支那人が過去に向つて其黄金時代を回顧せるが如く、ダビデと其子孫との王國であつて、そして之れから預言的理想が現はれ出て未來のイスラエル王國が描寫せられたのである。そこで將來のイスラエル王國は過去の光榮ある歴史的王國の再現にして、固より名譽や、富や、勢力や、稜威などを含蓄してゐたのである。かゝる王國の觀念は彼等が過去より連綿として相續傳襲せる自然の記憶に他ならなかつたのである。しかも彼等が數百年間鶴首覓望せるが如きダビデの王國は具體的に實現されなかつたのである。

天國は近けり イスラエル人は如上の理想と希望とに充されて生活しつゝありし間に、何時しか不滿足な、感慨にたへぬ一動一搖の永き歳月は矢の如く過ぎ去つたのである。即ちダビデ新王國の再興を期待せる希望は可憐にも不結果に終つたのである。かるが故にイエスの時代に於けるイスラエル人は殆んど失望の中に、強大なるロマ帝國の政權に壓迫せ

られ乍ら、せめても反旗を飜してなりとも、失なはれたる樂園の挽回もがなとて、もがきにもがける形跡を殘存せざりしに非ざるも、而も其企圖は望なき望であつた。しかし乍ら彼等王國再興の希望は全く消滅せし譯ではなかつた。此に於て窮せるイスラエル人は他に一道の光明を仰がんことを欲して從來とは異なつた方針と形式とに目を注ぐやうになつた。即ち王國は高き天より格外の手段によりて現はるべしと期待せらるゝに至つたのである。之を換言すれば、自然的王國の希望は消失せ、超自然的王國の理想は產れ出でイスラエルの神エホバは既に死せる者を活かし、現に諸國民を審判し、將に其民を擁護しつゝ、神自身の支配の下に正義と公平と光榮と稜威とを以てイスラエル國家を建設する底の非常なる休徵を天より降す所あるべしと思惟するに至つたのである。

斯て一方舊き形式のダビデ王國と、一方新しく現はれたる終末的王國との希望はイエスの時代に於て彼を圍繞せる氣分であつた。即ち此等が當時の二大暗流であつたのである。そこで前者は過去の歴史や、預言や、傳說などから產出するに至り、後者は窮餘に案出せられたものなるが、正に民衆の精神を皷舞し新イスラエルに向つて何等かを暗示しつゝ、

遂に默示文學を胚胎するに至つたのである。

如上の所謂る『ダビデ王國觀』と『終末的王國觀』とは當時の二大傾向にして一般人士を支配せるものであつたが、しかし乍ら實際の結果いかんを顧みれば、容易に其實現を認むることの出來ない事情であつたのである。即ちダビデ王統の回復とも、又格外の奇跡によりて齎らさるべき新時代とも、見ることの出來ない危機に瀕して居たのである。

由來イスラエル民族は地上の王國を熱望せる點に於て、餘りに國民的で、地方的で、物質的であつたとの批判をうけて居る。彼等は今一層宇內的で、世界的で、心靈的でなければならなかつたのである。我等イスラエル人を憶ふ毎に、我日本民族の過去と將來とを聯想せずには居られぬのである。我が民族も亦今一層世界的に、心靈的に進まねばならぬ必要があるのである。さあれ、當時のイスラエル人がイエスの所謂『王國』てふ言葉の眞意義と新理想とに通曉して居なかつたと云ふことは分明な次第なのである。

由來人類は理想を過去の歷史に求むるのと、之を將來の哲學に求むるのとの二つの傾向を有する。そして國家の理想を哲學に求めつゝ進む國家は、いかなる民族でも淸新な進步

の氣運を齎すものなるが、之に反して徒らに過去にのみ戀々たるの國家及民族は頑迷にして保守の弊竇に陷ゐつて仕舞ふ。そこでイエスの王國觀は歷史的であつたか、又は終末的であつたか、即ち彼の態度は過去に戀々たりしか、或は將來に孜々たりしかは古來幾多の人々によりて研究されたる所なるが、而もイエスは精神的形式に於て之を求め、如上兩者孰れにも實現されざる心靈的王國として之を思惟したのである。（太四〇十七、五〇廿、六〇十、三三、九〇卅五、十〇七、十三〇廿四、卅一、卅三、四四、四五、四七、廿〇一、廿二〇二、約十七〇九、十一、十三、四、五、六、二三等參照）

第四十一講　續講

現世を舞臺とする王國　イエスと共に來りし王國は此の現世を舞臺として活動する所のものである。即ち其王國は既往歴史の復活によりて創造される所の秩序や、形式や、方法にも非ず、さりとて又見えざる世界の俄かに非常手段を以て侵入し來ることに由りて經營せらるゝものにも非ず。しかも我等人類の生活し、存在し、活動する所には何處にも實現する一大生命なのである。固より我等は今日の此の生活以外に永遠の生活を信仰するものなるが、而も王國は現在より繼續せらるゝものあるを以て、其風光は現世から認めらるゝのである。かくてイエスと共に生れた王國は外形的、物質的のものに非ずして、內的、靈的性質を帶びて居る。故に其の光景は外的よりも、內的、道德的及び宗敎的色彩を放つてゐる。即ちイエスと共に生れた王國は此の世の王國ならざる、世俗的ならざる精神的王國なのである。かるが故にピラトの問に對してイエス答へて曰く『我國はこの世の國に非ず、もし我國この世の國ならば我僕我をユダヤ人にわたさゞる爲に戰ふべし、然ど我國は此世の國

ならざるなり』と。そして我等にして實際其意味を會得せんと欲するなら、神國が人間の實際生活に於ける强大な生命の秘義たることを認めねばならぬのである。

件の秘義とはイエスと共に齎らされた王國は、直にイエスよりその性質をうけて居ると の事是れである。即ち其王國はイエスの影であつて其國と彼とは形影相伴うて居るのである。之を換言すれば、則ちイエスの理想の實現に他ならぬのである。そこでイエス出現して聖き、高き、深き、廣き敎訓を垂示し、之に加ふるに崇高森嚴なる生と悲痛壯烈なる死とに於て、其事業を全うし給ひしが故に、之れより往古のユダヤ人等が期待せし王國よりも、一層偉大な、而も深邃な、奧妙な王國は漸く實現さるべき曉に達した次第なのである。即ち我等の生活と社會との間にイエスに依れる生活律が顯はれ來りて、眼前に王國が開展せられ、擴大せらるゝのである。件の精神を概括すれば、王國は現在に於ける人生の秩序であり、其地位は外形に存せず、倫理と宗敎とに存し、そして其倫理と宗敎とは直にイエスの敎訓と感化とに密接な關係を有することゝなるのである。

王國は奉仕の國也　されば王國は隔たれる高き蒼天に位置を有するものに非ず。又遙に

遠き未來をまつて後、始めて現はるゝものにも非ず。又其建設地はエルサレムの山にも非ず、ゲリヂムの山にも非ず、王國は已にイエスと共に此の世に現はれつゝあるのである。即ち此の現世に於て輝ける王國なのである。人類に身を捧げしイエスは其王國の王者として、既に高位についたのである。かるが故に王國の性質は他人のために無私、無慾の精神を把持して、相互の奉仕と援助とを實行する所に存するのである。そこでイエスの王國はイエスの如き僕の國とも謂はるゝのである。

かくてイエスは弟子達に向つて『爾曹のうち大ならんと欲ふ者は、なんぢらに役はるゝものとなるべし。又なんぢらの中、首たらんと欲ふものは、なんぢらの僕となるべし』との訓誡を垂れ、そして偉大にして高貴なる運命と報償とは謙遜にして低き奉仕をも敢て實踐躬行する所から來るものであることを敎へてゐるのである。如是はこれ此の王國の實現せらるべき方法であつて、そして相互に兄弟と呼び、姉妹と稱して相顧み、相助け、相勵し、相交はるのが即ち王國の法則なのである『人の子の來るも人を役ふためには非ず、反て人に役はれ又多くの人に代りて贖となる』のが王國に屬するものゝ使命なのである。所

謂る人類に奉仕するのが、その王國に於ける高位者の特權である。斯く奉仕する人が高き人なのである。イエスの如く己を捨て、謙りて人に奉仕するものが、眞に王國に於て高き位の人たるをうるのである。

斯く道德的な、實踐的な、社會的な王國は、同時に心靈的、精神的、宗敎的王國である。もし此の王國が宗敎的でないなら、健全にして光榮ある倫理的秩序の成立は不可能の事たるや論をまたないのである。蓋し神は人類の間に生活し給ふ神にして、人は神より生命を獲て其王國の一會員たるの特權をうるのである。神を離れて生命なき人類は、悉く彼より生活の動機と鼓吹とを受くるのである。そこで神に賴りて成立する人生は、即ち宗敎の舞臺にして此に王國の全經營が横はつて居るのである。そして此の王國は愛に根ざして居るのである。故に愛なきところには王國は存在しない。件の愛は神秘家の中にも生長し、冥想家の間にも發達するものなるが、最もよく實生活の間に擴充せらるゝのである。即ち多數人士が相互に相助けつゝ生活する所に最も能く發達するのである。眞に無慾の愛と奉仕の精神とを以てイエスの友たり、僕たるものゝ中に彌々、益々生長するのである。此の愛

こそクリスチャンのなくて叶ふまじき理想を代表してゐるのである。

イエスは王國の創始者　要するにイエスは王國の中樞にして又無双の鼓吹者である。イエスは人生の各方面に於ける一切の義務は靈的、永遠的であるから最も高き靈感を要することを認めて居た。彼は地上の道德は天に根柢を有し、そして天の事業は地の道德より始まることを信じて居たのである。即ち倫理を體となし、宗教を其靈となして我等に活ける生活の模範を垂れたイエスは所謂斯世の王者ではなく、靈の王國を支配する活ける眞理である。

第四十二講　三大王國の統一者（約十九〇十九、二十）

言語の裏面に潜む眞理　曾てエマソンは『言語は化石せる詩歌なり』といひ、又『人は言語の中に知らずして人の歴史を刻み込むことあり』といつた。實に一言一句の中に其時代の精神や、歴史や、傾向などを語つて居る。我等聖書に記載されてゐる言葉を辿りて奥ふかく踏み込むとき、其處に隱れたる無量の寶を發見するのである。當時イエスを十字架につけた時、罪標にヘブル、ギリシヤ、ロマの三ヶ國の言語が使用された所以は、彼等各自の三大民族に知らしむるためであると共に、愚弄せる態度を表はしたものである。しかも其廣告的な、嘲笑的な言語と態度との裏面に知らずして一大事實を暗示して居る。即ち十字架につけられたイエスは『全一人』の實現せる救主であつたとの事是れである。由來古代に於ける三大民族たるヘブライ人の感情も、ギリシヤ人の思想も、將たロマ人の意志も、各々其の一方に偏して居て、云はゞ彼等民族性は斷片的な發達を遂げたものである。しかるにイエスは十字架の上に於て之を完成し、成就したのである。

三國語は人格の三要素を示す

ギリシャ人は知識の人である。元よりギリシャ人に情や意志などが無かつた譯ではない。詩人ホーマーも出づれば、勇者亞歷山大王も現はれた。しかもアテンスは知識の樂園であつた。ソクラテースや、プラトーや、アリストートルなどは知識の樂園に於ける代表者と謂はねばならぬ。次にバレスチナはいかんと云ふに、感情の故郷である。ヘブル語は哲學の言語にあらず、又論理の言語にあらず。即ち詩歌の言語、人情の言語である。實に情操を高調するに最上の言語である。ヘブル人の間に哲理者ヨブや、立法家モーセや、智者ソロモンなど現はれしも、ダビデや、エレミヤや、イザヤ抔は彼等以上に歌へる情操の音樂者であつたのである。就中其心に富めるダビデは詩をつくり、竪琴をかなで、又エルサレムの宮殿を建てたのである。即ちアテンスは『腦の都』であつて、エルサレムは『心の都』である。次にロマはいかんと云ふに人間の野心と成功とを語つて居る。即ちラテン語はロマ人の征服的、冒險的、政治的野心を語つて居るのである。彼等の間に智者シセロや、マーカス・アウレリヤスなどなきに非ず。ヴージルを初め、他に詩人現はれざりしには非ず。而もロマは豪傑シーザーによりて人格化されたと謂ふ

べきであらう。

何故に亡びしか

ギリシャ人は知識の人格化せるプラトーを有せしも、心と意志とを缺いて居たのである。單に分解的な知識のみでは綜合的な人生を纏めて行くことは出來ぬ。知的なギリシャ人が綜合的な人生を經營し得なかつた弱點は此處に認められる。由來知の結果は合理的である。合理的の結果は懷疑に陷ゐる。懷疑的の結果は行き詰つて前進することが出來ない。沙翁のハムレットは智に優れた人物に出來上つてゐる。そして哲理的詩人と云はるゝコルリッヂは我はハムレット也と自稱せる如くハムレットを最も愛したと云ふことである。智に偏せるコルリッヂは確かに圓滿な詩人ではなかつたのである。さあれ。ギリシャ人は知識を以て國を建て又之によりて亡びた。次にヘブル人は情の人格化せるダビデを有し、愛國の熱情中に救主を發見せんと試みたのである。しかも憐れヘブル人はギリシャ人が心を缺ける如く、智と意とを缺いてゐたのである。ダビデは心情に於て發達せるも、ギリシャ人の智とロマ人の意志を缺如してゐた。果して人格の完成は情に富み、涙に濡へるエルサレムに於ても遂げられなんだのである。次にロマ人は意志の人格化せるシ

ーザーを有せしも、しかもギリシャ人の智とヘブル人の情とを缺ける結果は、無慈悲な、頑固な、殘忍な、非人道的なものとなつて仕舞つたのである。實にロマ人にはダビデの立琴なく、プラトーの理想なかりしが故に、劍を以て國を興し、又劍によりて亡びたのである。

三大王國の統一者　イエスの十字架に於て『智の王國』と『情の王國』と『意の王國』との主權、統一を認めざるを得ないのである。即ちヘブル、ギリシヤ、ロマ、之を換言すれば、智、情、意の三大王國を支配する者はイエスの人格なのである。眞にイエスは三大王國を調和し、統一せる王者である。イエスは自ら『我は眞理なり』又『眞理に就て證をなさん爲也』といひ、『父よ彼等の罪を赦し給へ』又『心の清き者は福なり』といひ、『父の事業を爲す是れ我糧なり』又『我父は今に至る迄働き給ふ我も亦働くなり』といひて、件の智、情、意三者を並び合せてゐる。即ちイエスの眞理は神の智の閃き、其の情は神の愛の活動、其の意は神の意志の反響と謂ふべきであらう。我等は眞にイエスに於てプラトーの心、ダビデの心、將たシーザーの心を融和せる全人の生活を認めずには居られないので

ある。

兩三年前、帝大教授某博士は『東亞の光』誌上に四聖を論じ、孔子、ソクラテス、佛陀、基督の四聖を二別して、前二聖を世間的聖人となし、後二聖を出世間的聖人となし、そして孔子は聖の圓熟せる者、ソクラテスは聖の至知なる者、佛陀は聖の超絶せる者、基督は聖の激昂せる者なりと云つたことがある。我等は所謂基督は聖の激昂せる者なるや否やを知らずと雖、而も基督は完全圓滿なる至聖と仰がねばならぬのである。故に意志のみを以て國民を造らんとする國家も、知識のみを以て國民を造らんとする學校も、情のみを以て國民を造らんとする文學も、眞人を造らんが爲にイエスを要求して居るのである。

第四十三講　復活の事實（約二十〇九―十七）

次は何ぞや　由來人間が死を嫌ふ念の裏面には死後に生を欲する希望を暗示してゐる。通俗な例ではあるが、印度の宗教を信ずる者が未來の蓮華往生を希ひ、アラビヤ人が未來世に於ける感覺的樂境を夢み、アメリカインデアンが同じく茫漠たる獵場を想像し、エキスモーが未來世に於て氷の家と脂肪多き魚肉とを期待するが如きは、いかなる民族の間にも死後の生活を希求する本能性の存することを證據立てゐるのである。そこで我等が動物的存在者たらざる限り、各自靈魂不滅につきての信念を有することを欲せざるものはない。もし我等の生活が六十路、七十路の生活のみに限られて居るとすれば、啻に我等の幸福に關する觀念に大なる影響を及ぼすのみならず、現世の行爲と生活とに對して尠からざる惡しき影響を齎すものあるや疑ひないことである。しかし乍ら我等が此地上に於て他界を眺め、有限界を通して無限界を望み、朽ち果つべき物質界の拘束に超越して、墳墓の彼方に不死不滅の心靈的大世界の存在することを想像し、思惟し、そして之を確信する場合に

は、此の世界は常に我等に向つて歡喜と希望と生命とに漲ぎる樂境となり、天國となるのである。蓋しイエスの復活によりて人類が齊しく有する『次は何ぞや』即ち未來永遠に對する大願望に裏書きせられたのである。

大なる明日の狀態　由來靈魂不滅の觀念は我等の心中に或は隱れ、或は顯はれてゐる。我等の理性は常に『我は何時までも生活すべく造られて居るや、未來世に於て我等の生活は如何なるものなるや、死者は復活すべきものなるや、將た其形體はいかなる狀態にて成立するものなるや』てふ神秘の問題に對して挑戰してやまぬのである。而も我等は低き茅屋を照らす微光によりて遙に蒼天に輝ける星の光の如何なるものなるかの一斑を諒解しうる如く、我等の永遠性や、不朽の叫びはイエスの敎訓の一端によりて之を直覺し、又之に關する知識を增進しうるのである。即ち『此世の子は娶り嫁ぐことあり、彼世に入り死より復生るに足るものは娶り嫁ぐことなし、……それ神は死たる者の神に非ず、生る者の神なり蓋は神の前には皆生る者なればなり』（路二十〇三四以下參照）是に由りて之を觀るにイエスは現世の知識によりて未來世の希望を把持せしやうに見ゆ

るのである。當時のサドカイ人等は靈の存在も、未來の生活をも信じなかつたのである。そして精神的虛無主義の彼等は日頃其生活上道德的熱情を有して居なかつたのである。彼等は愛國の情操にも缺けて居たのである。かくてイエスは來るべき『大なる明日』は此世界の如きものなるべしとの謬見を抱ける彼等を斥けたのである。固より天に屬る物の形體と地につける物の形體とは異なり、此星と彼星と其榮また各々異なつて居るのである。加之ならずイエスは進んで彼等が祖先の國民的意識に向つて火を點せんとしてゐる。即ち『それ神は死たる者の神に非ず生る者の神なりそは神の前には皆生る者なればなり』と喝破してゐる。もし彼等にして祖先は既に死し、神は死者の領土を支配するを以て滿足するものであると想像するなら、人間の現在生活の意識及び活ける神の信念に關して全く否定し去る次第となるのである。しかし乍ら我等はいかにイエスの未來觀が單純で、純潔で、而も確實なものであつたかを思惟せずには居られないのである。

生を愛する觀念　我等は生を愛する。そして若し生を愛するの念なくして生活を樂しむ者ありとせば、それこそ實に可憐なる生と謂はねばならぬのである。我等は本能的に生を

愛惜するものである。我等は生きて死なざらんが爲に生を愛する。我等は死は人間の全生活に矛盾するものあるが故に益々生を愛するのである。我等は啻に生の永續を信ずるのみならず、其生は我等の勢力を增加し、其存在を擴充する活動であることを信ずる。我等はより豐富な、より偉大な、更により完全な生のために飽く所なき祈禱と憧憬とを有つてゐるのである。我等は生を愛すべく造られて居るが故に陰府に下るとも生を愛せずには居られない。そして更に晩年に及んで益々確乎たる目的と希望とを以て神の備へ給ふ豐かな生を愛するに至るのである。我等は生のために生れてゐる。生は死ではない。生は人間固有の最高な賜物であると謂はねばならぬと思惟する。

生の不朽を裏書きせるイエスの復活　我等はイエスの死と其復活とに於て最も深甚な、強大な生の不朽意志と其實證を認むる。イエスは我等の爲に喜んで其身を捨て給うたのであるが、彼の生は依然として死の絆に囚はれなかつた。イエスは其死とそして葬らるゝことを預言し給うたが、墳墓の中に横はりて空寂に歸し去らなかつたのである。即ちイエスは其全生涯を一貫して顯はれてゐる永生に關する強き意志と目的との秘義をこゝに敎

へて居るのである。『我は生命なり』てふ眞理はイエスの神秘な生と死と將た其教訓の中に溢れてゐる。古往今來仁者、義人の靈はいかなる迫害と苦痛とに遭遇するも限りなく生くべしとの大確信があつた。其處に殉教者の生涯に於て永遠に亘る所の勝利の意志が顯はれて居る。人類は所詮無一物の空所に歸することを肯せぬ。人類はその活ける意志の中心が壞滅に歸し去ることを好まぬのである。

第四十四講　續講

生んとする意志　かくて生んとする意志及び生んがために自覺以て肉體の死をも忍ぶ決斷などは、神につける信仰を有する人々の靈の意志である。此意志は肉體の死滅と共に敢て靈肉の分離を肯んぜないのである。生の意志は總ての愛を傾注し、又一切の思想を集中する力を有し、やがて永遠の眞理を發見し、活ける神を禮拜するに至りて高貴な生活の中に不死、不滅の力を確信するのである。即ち此の生んとする意志は、培養せられ、修養せられ、剛健にせられて流轉變化の中に確乎たる自信の見地に立ちて永遠的憧憬を有するに至るのである。たしかに件の憧憬は物質的破壞の勢力よりも、より强き、より確實な力を齎す所の動機となるのである。かゝる生んとする意志は人生の艱難、不幸、痛楚、懊惱などにも打かち、かつ死の岸に瀕する臨終の場合にも凱旋的態度を贏ちうべき神の如き意志である。かゝる生んとする意志は死滅に打勝ち、物質にも拘束されない永遠の生の實現たるイエスの如き意志である。そしてイエスの復活は死に打ちかてる充分なる勝利を啓示し

て居る。即ちイエスの復活によりて來世に關する信仰は確實にせらるゝのである。之によりて永遠界の消息は洩らさるゝのである。彼の生に關する確信は、弟子達に遺し給うた言葉を通して會得せらるゝのである『なんぢら心に憂ることなかれ、神を信じ、又我を信ずべし、我が家には第宅おほし、然ずば我豫てなんぢらに之を告ぐべきなり、我なんぢらの爲に所を備に往く、もし往て我なんぢらの爲に所を備へば、又來りてなんぢらを我に納べし、我が居る所になんぢらをも居しめんとて也』と。此處に神を信じ、イエスを信ずる者は死に囚はるゝことなく、永遠の家に安住すべきことを敎へて居る。イエスの生涯、即ち死に打勝ちし勝利の生涯は、實に人生の詩となり、藝術となり、哲學となり、光明となり、將た指導となつてゐるのである。かくて我等の生活は日毎々々高き目的と靈の意志とを以て經營せられ、一朝かの世に移らんとする塲合にも躊躇狼狽するところなく、平和に、大膽に自由な世界に入ることをうるのである。そこで我等クリスチアンは死てふものは、單に自然界の法則に拘束せられて止むを得ず服從する譯でなく、此の世と彼の世との交替に臨みての變動期に於ける靈の積極的經驗であつて、彼岸に打開かれてある其生命に到達

せんとする渴仰と見るのである。

天の一方に輝ける光り　此處に東より西へ空中に懸つてゐる一條の輝ける光りありと想像せよ。そして其光は我等の視線以外、遙に認められざる處にありと想像せよ。抑も其光は確實に目擊する能はざるも、而も蒼空に放たれて居る何等かの光線であること丈は知らるゝのである。そして其處には我等の測り知る所の物よりは、更により多く、より良き物の存することを知るに至るのである。一言にして之を云へば、空中に懸る所の光線其物は、彼方より若くは上天より來る所の或る啓示たらずんばあらずと想はるゝのである。そして靈界に屬する眞理と並に人生の心靈的經驗とに關する眞理も、之に類似して居るものなりと思惟することが何故に出來ないであらうか。我等が今握つて居る事實の幾分かは、未だ實現しない其の眞理の或者であることを信ずるも差支はなからう。我等地上の生活の觀測によりて上天の起源と其歸趣とを推測するに何の差支があらうか。尙ほ之を切言すれば、我等の生活の經驗は徹頭徹尾死を否定して生を憧憬するのである。我等が地上に於て有する生と愛とは、我等未知、未踏の境に屬する永遠界に亘りて相續し、連續し、完成し得ら

るゝものと信じらるゝのである。即ち我等は生のために產れたるものにして、決して死のために產れたるものに非ず。又我等は死の領分に於て死人を守護なし給ふ神を信ずるに非ずして、恒に活きて永遠に我等を攝理なし給ふ神に靈交せんがために造られてゐるのである。我等はイエスの復活によりて死の悲哀より生の歡喜に移り、死の懊惱より生の平和に轉り、地上の生活より永遠の生活に入り、一時の現象より永遠の實體に歸り、すゝんで苦痛の荒海を越えて、法悅の聖地に達するの順序を學びうるのである。今春我邦に渡來せるブラウン教授は其著『基督教要義』の中に斯ういうて居られる。

『死後の狀態に關する問題よりも一層大切なのは、死後の生命に就いての信仰の基づく所の證據の問題であつて、吾人は此點に於て基督教の特有なる貢獻を見るのである……然し基督が持ち込み給うたところの人格の價値に對する新感覺のみが來世存在の事實を吾人に保證することが出來るのである。

神の子たる此實驗に於て、吾人は靈魂不滅を信ずる信仰の唯一の確證を見出すのである。これ以下の實驗では、個人の生命が無窮に永續することの希望を保證するに足る程の尊嚴

と價値とを個人の生命に與へない。此世界は滅することもあらう、又神は其代りに他の世界を造り給ふ事が出來るが、しかし父の心中に於てどうして一つの子が他の子の代りとなることが出來ようぞ。此點に於て何時もの樣に吾人は基督に歸るのである。即ち基督のやうな生命が全く暗黑中に沒して了つたとは到底信じられない事である。而して吾人自身の永生の希望は吾人も亦此基督の樣になれるといふ信仰の中に包含して居る云々』と。

（譯文三三〇、三三一頁）あゝ、『我神すなはち爾曹が神に升る』といへるイエスの御聲は永遠界の曉を報ずる福音である。

第四十五講　イエスの使命と我等の使命（約廿〇廿一）

大なる夕に於ける大なる命令　史上最も大なる夕に於て、イエスの去られたのち終日、終宵、いかにも懸念にたへかねた少數の弟子等は、此處にイエスが再び現はれ給ふとは期せざりしならんも、しかも主に對する敬慕、渇仰の念は瞬間も消え失せなかつたから、戸締りをし、鳩首して居たのである。しかるに『此日の暮時すなはち一週の首の日、弟子等ユダヤ人を懼るゝに因て集れる所の門を閉ぢ置きしが、イエス來りて其中に立ち、かれらに曰けるは爾曹やすかれ』とあつて、かゝる閑寂な、荒涼な、悲哀な夕べ、恰も空谷に跫音をきくが如き音づれがあつた。そして更に又イエス自らその手と脅を彼等に示し給うた。此に於て弟子たちは主を見て大に喜びたるがイエス再び彼等に向つて『なんぢら安かれ父の我をつかはし、如く我も爾曹を遣はさん』と仰せられたのである。

如上の宣言は何たる權威ある言葉であらうか。イエスは自己を父の協力者となし『父』と『我』とを分つことの出來ない一體者となして居給ふ。即ちイエスは天の父と自己とを

同一なものと自覺して居給ふのである。かゝる理由によりて吾等はイエスの神性を認めざらんとするも能はざるのである。

神の子と其の弟子　主が自己と神との關係を表はしたやうに、自己と弟子たちの關係を表はした著明な記事は、使徒ヨハネのみが此處に掲ぐる所のものなのである。此の節に於てイエスは上なる方面と下なる方面との兩側面に亘つてゐて双方に相通じ、且つ双方の關係を結合する中心であることを確實ならしむる。そしてイエスは父と我等との間に立つて天と地とを一致せしむる連鎖となるのである。『わが肉を食ひ我が血を飲む者は我にをり、我も亦かれに居る。生る父われを遣はす父に由て我が生る如く我を食ふ者も我に由て生くべし』（約六〇五六、七）といへる精神は今此處に如上の形式を取つて表はれてゐる。又『父の我を愛し給ふ如く我れなんぢらを愛す』（約十五〇九）とあつて此處にも亦我等は父より子へそして子より弟子へと相關聯してゐる次第を示して居る。又『己の羊を去るまた己の羊に去らる。父われを去るごとく我も父を去る』（約十〇十四、五）とあつてイエス自ら善き牧者たることを證言し、そして自己と羊との間に於ける完き理解を表彰してゐる。本來

羊と牧者との間には本能的認識が存してゐるのであるが、恰も斯樣な認識は父と其子とに存する如く、子と其弟子たちの間にもあるのである。

更に『もしなんぢら我誡を守らば我愛に居らん我れわが父の誡を守りて其愛に居るが如し』(約十五〇十)とあつて服從は愛に對する試驗石となつてゐる。此に主はいかにも愛の礎の深きことを表はし給ふ。愛の法則は單に地上の關係に限らるゝものでなく、實に天の事情にも支配の及んで居ることを敎へ給うたのである。更に又『なんぢ我を世につかはしゝ如く我も彼等を世につかはせり』(約十七〇一八)とあつてイエスは父より受けたものを弟子たちに讓り、そして弟子たちの働きは畢竟イエスの働きに他ならぬ密接な事情が言ひ表はされてゐる。そこでイエスが此の世に現はれたことや、今も尙敎會の中に働き給ふことや、其信者たちが主の爲に活動することなどは、イエスの受肉の實現であり、連續であるのである。即ち父が先づ其子に渡せる使命は、其子によりて弟子たちに渡され、其弟子たちより弟子たちへと繼承せられ、相傳せられて神の廣大なる贖罪の事業が遂行せらるるのである。

我等は同一の記者の言葉として之を看過にすることの出來ない、形式は異なるも其精神は同樣なる引證を他に有つてゐる。即ち『勝をうる者には我さきに勝をえて我父と偕に其實座に坐するが如く我と偕に我が實座に坐することを許さん』(默三〇廿一)とあつて此處に我等は兩者の關係が最後に至るまで永續することゝ、そしてイエスの民の最後の勝利と其光榮とは天に於て完成せらるゝものであることゝを學はねばならぬのである。

イエスの使命は何ぞ　其使命の第一は『啓示』である。其の啓示は何ぞと云ふに天の父の聖旨や、其愛を顯はすことなのである。天の父は其子に自己の愛を表現することを托し給うた。獨子を賜ふほどに此世を愛し給うた天父の愛は、罪人の爲に其身を捨てたイエスによりて發揚せられたのである。神は叛逆と耻辱と暗黑と苦痛とにて充てる此の世を愛し給うて獨り子なるイエスを遣はし給うた。そしてイエスの生涯に於て神の本懷、即ち愛は鮮かに認めらるゝのである。

其使命の第二は『贖』である。即ちイエスは多くの人に代りて贖とならんために出現し給うた。イエスは天の使者も、如何なる人物も遂行することの出來ない犧牲的な、贖罪的

な使命の爲に現はれ給うたのである。イエスの出現によりて聖なること、義なることの觀念は其頂に達せると同時に罪の惡むべきこと、之れより脱すべきことの經驗は深甚にせられたのである。

其使命の第三は『救拯』である。世を救はんがために來れるイエスは稅吏や、罪ある者や、捨てられた者や、死せる者などの上に母のやうな愛の手を伸ばし給うた。加之ならず、イエスはユダヤの宰にも、祭司にも、ピラトにも、カヤバにも、更に自己を十字架につけし者にも、十字架上の盜賊にも『我と偕に樂園に在べし』との救の御聲は普く及んで居たのである。

第四十六講　懷疑者トマス　（約二十〇二四—二九）

疑惑に囚はれたトマス　トマスは底意地あしきドコ迄も執拗な懷疑者ではなかつたが、而も一旦は疑惑の街に彷徨うたのである。かるが故に他の弟子達が失望の中にも希望をもち、暗黑の中にも光明を探り乍ら小集會を開きたる時も、トマスは其處に集はなかつたのである。かくて三日の後、主の甦りを目擊するものありしも、此處に在らざりしトマスは、他の弟子等の實證をも信ずるに至らず尙ほ『我もし其手に釘の迹をみ、わが指を釘の迹に指しわが手を其脇に指すに非ずんば信せじ』と叫んだ。此にトマスの懷疑的態度は遺憾なく暴露されて居る。

然れ共トマスは嘗てイエスと共に死することさへも厭はぬ程の勇者であつた。弟子達はユダヤ人が尙ほ石をもて主を擊んと氣遣うて居た時『我儕も亦往きて彼と共に死ぬべし』(約十一〇十六)と叫んだのは、イエスに對する熱愛の存するものがあつたからである。さあれ、イエスの十字架は一旦彼に失望を與へ、從つて彼を懷疑の中に陷ゐらしめたのであ

る。かくて八日を經て後、トマスも他の弟子等と偕に一室にありける際、イエス來りて其中に立ちて曰けるは『汝等安かれ』と。更にトマスにいひけるは『汝の指を此に伸て我手を見、汝の手を伸て我脅にさせ、信せざる勿れ、信せよ』と。遂にトマスも自ら實證者となり『我主よ我神よ』と絶叫するに至つたのである。暫らく疑惑の桎梏にかゝりたりしトマス、今や漸く放たるゝ人となつたのである。

必要なることはイエスの爲に仕ふる事　嘗てトマスはイエスと『共に』死なんとまで決心せし程であつたが、イエスの『爲に』死なんことを欲し、又イエスの『爲に』殉せる者の生涯は、共に死なんとしたトマスよりも優れるものである。トマスの弱點は此の『共に』といふ所にある。千里獨往と云ふことは容易に出來かぬるが、人と共に進むことは、多少の困難があつても、大概の者には實行の出來るものである。しかし乍ら我等に取りて必要なることは『共に』ではなく『爲』にである。即ちイエスと偕に死することでなく、彼の爲に死する覺悟が必要なのである。イエスの爲に生き、彼の爲に活動し、彼の爲に全人格を捧ぐる生涯が必要である。是れ必ずしも世間を離れて隱者の生涯を送らねばならぬと云

ふ譯ではない。即ちイエスの心を以て我一生を貫くことが彼の爲に死する所以なのである。

イエスを離れて何處に往くべき　次にトマスは一時の失望と懷疑との爲に弟子達と別かれて居た。そこで種々なる故障や、不熟心のためにイエスの名によれる集會に列ならざる信徒はトマスの態度に類するものがある。イエス嘗て多くの弟子等それ〴〵自分の處に返りゆきて己と偕に行かざるを見給ふや、十二の弟子等に向つて『汝等も亦去んと意ふや』と仰せられたとき、ペテロは『主よ我等は誰に往んや、永生の言を有る者は爾なり』と答へたが、實に此の答は古今に亘れる大眞理である。我等はイエスを離れて何處に往くべきぞや。一旦イエスを離れたトマスも人生の孤立に耐へ得なかつた。救主なき生涯に滿足を見出し得なかつた。友なくして安んじ得なかつたのである。

我主よ、我神よ　トマスは一旦友に別れしも人生の孤立寂寞にたへかねて、再び友の許に立ち歸ると同時に、イエスを認めたのである。イエスはトマスの性質を知悉し給ふのみならず、何故に己を捨てたかの理由も諒解し給うたから、進んで自己を證明し『信せざる勿れ、信せよ』と强くすゝめ給うたのである。由來人類は常に何等かの桎梏を脱せんとの

念に充ちて居る。トマスも此の機會が自由の人となる好機となつたのである。『我主よ、我神よ』との絶叫は人類の最深處より發する聲にして、即ち放たれた人の讃美である。鹿の谿川を慕うてやまぬやうに、我等も神を憧憬してやまぬ心を有する。靈官の窓を通して我心は大なる天地を望んでやまぬ。我心は地を離れて天に達せんとしてゐる。我心は一切の源頭に到達せねばやまぬ大希望がある。斯の如き直覺、衷情は人類の普遍性である。此の心が即ち宗教的本能性とも云はるゝのである。トマスも懷疑を經て後に之を發揮したのである。

見ずして信ずる者は福なり　しかし乍ら『汝我を見しに因りて信ず、見ずして信ずる者は福なり』とはイエスの至言である。見ずして信じ、きかずして信じ、音なき音をきゝ、香なき香をかぐ底の直覺と達觀とは聖徒の生涯に必要である『それ信仰は望む所を疑はず未だ見ざる所を憑據とする者也』とは信仰の秘義を穿つて居る。我等は更にテニソンの歌へる信仰の秘義を擧げて學びたい。

『我等はなんぢの御顏を見る能はざるも、信仰によりて只だ信仰によりて爾を抱かんと

す、證明し得られざるも、只だ信仰しつゝ』。

『あゝ、知識は湖面の水をかすり行く燕の如し、知識は蒼き空と海と綠の地との奥底に、また秘義の秘義に潛り行く能はず』。

『信仰は禍の裡に閃めく福を見、太陽も只だ一夜かくるゝ者なるを感じ、冬の芽を通して夏を豫想し、花の落つる前に果を味ひ、歌なき卵の中に雲雀をきゝ、夢幻を悲しみつゝも其中に泉を發見す』。

現代人は不安懷疑の中に彷徨うて居る。滔々たる世人、トマスの傾向なき者はない。我等は不信不虔の牢獄を脱して敬虔の天地に自由な生活を營まねばならぬのである。

第四十七講　見ずして信ずる者は福なり。（約二十〇二九）

信仰の祝禱　余は前講に於てトマスを講じた際、本講の精神を一言して置いたが、尚ほ今爰に學びたいと思ふ。さてイエスが靈に目醒めたトマスに向つて『爾われを見しに因て信ず、見ずして信ずるものは福なり』と仰せられ、イエスが傳道旅行の最初ガリラヤ湖邊の山上に於て發揚せる所謂『心の貧しき者は福なり天國は即ち其人の有なれば也』『柔和なる者は福なり其人は地をつぐことを得べければなり』『心の清き者は福なり其人は神を見ることを得べければなり』『和平を求むる者は福なり其人は神の子と稱へらるべければなり』云々（太五〇三―九）の七福に更に一大祝福を加へ給うた。即ち今や地上の事業は終局を告げて將に天父の許に昇らんとするに當り、イエスの服從者に對して『見ずして信ずるものは福なり』てふ祝福を遺し給うた次第なのである。是れ實に『見ずして信ずる者に』對する大なる祝禱にして又代々の基督教會に對する奬勵であり、力であり、慰藉である。

福とは何ぞ　元より靈的福である。此は見ずして信ずるもの、享有しうる特權である。そして高貴な福にして自ら世の物と異なつてゐるのである。一旦は懷疑に囚はれたトマスも復活の主を凝視した時、『我主よ、我神よ』と讃美の聲を發したのである。しかし乍ら見ずして信ずるもの、福は、見て信ぜしトマスよりも、更に福なのである。即ち曰く『爾われを見しに因て信ず、見ずして信ずるものは福なり』と。此の信仰こそ實に尊き祝福と謂はざるを得ないのである。

見えざる世界に於ける信仰　我等が單に視官を以て見る所のものよりも、より多く見ることを得せしむるものは信仰の力である。信仰が見聞によりて起ることは實際である。しかし乍ら實驗の證明丈では魂に向上を促がすことは出來ない。即ち外部の證明や、五官の實感や、周圍の誘引等丈では强き道德的宗教的確信を齎すことは出來ない。眞に事物の根本に觸る所のものは外よりに非ず、內より働らく靈的作用である。此に於て件の信仰は未だ曾て見聞せざりし所のものを信じ得せしむるに至るのである。そこで『それ信仰は望む所を疑はず未だ見ざる所を憑據とするもの也』とある。之を換言すれば靈感が五官以外に

達し、そして未だ見ざる所を實驗せる如く認むる精神作用が即ち信仰である。曾て一人の天文學者曰く『我は望遠鏡を以て天體を眺めたれども、神を發見し得ざりき』と。此の天文學者は星の間に神を尋ねしが故に、神を見出し得なかつたのである。由來人間は神を見出し得なかつたのである。しかも『穹蒼はその手のわざを示し、この日言葉をかの日につたへ、この夜知識をかの夜におくり、語らずいはずその聲きこえざるに、その響は全地にあまねくそのことばは地のはてにまで』及んでゐるのである。そして數千萬の靈魂は望遠鏡によりて蒼穹の間に神を見出さざりしも、純な心を以て、清き心を以て、碎けたる魂を以て日となく夜となく人類に語り給ふ聖聲をきゝ得るのである。そして永遠の神は人類の避難所にして地は其腕によりて支へられてゐる。實に天文學者は神を發見し能はざるも、單純な心は『信ずるものは福なり』と囁嚅いてゐる。

信仰は官能に相反する如き者をも信ぜしむる 人心には單なる懷疑的理解と靈的作用、即ち假定と信仰と、肉的と靈的との永遠に反對の働きがある。此の二傾向は『斯くあるべし、若くは斯くあらん』との聲となり、或は『いかにして此事あらんや、若くは何故に此

事ありしや』との聲となるのであるが、謂ふ迄もなく後者の聲よりも前者の聲は高き靈的作用を表彰してゐるのである。そして我等の道德、宗敎、及び生活の高貴なる形式等は 悉く『斯くある可し、若くは斯くあらん』との信仰より顯はれ出づるものである。詩人は歌うて曰く『目的なく、朋友なき途ありや、否。神は高に在して低き地上を顧み給ふ。其處に朝あり、晝あり。そして夕も亦直に來る』と。信仰の眼には天地 悉く美を盡し、善を盡して顯はるゝのである。

又主は我等に何故に見ずして信ずるものは福なるやの理由を語らずして單に『福なり』と云ふに止まつてゐる。此の福と山上の垂訓に顯はれてゐるそれとの間に自ら差別を存してゐる。即ち柔和なる者は福也、其人は地を嗣ぐことをうべければなり。心の清き者は福也其人は神を見ることをうべければなりとあるも、此處には信仰に對する特別の酬につきては記されて居ない。かるが故に信ずる心は福也、其人は希望の慰藉を得べければなりとは敎へられて居ないのである。そこで信仰の福は一時の幸福や、物質的或物の享有などよりも、より高き或ものを含んでゐる。實に『見ずして信ずる者は福なり』との意義

は此處に存してゐて、信仰其ものが其報酬であり、應答である。かくて信仰の法則は『信仰を有する者には信仰の福與へらるべし』との事に言ひ含めらるゝのである。

如上の祝福は更に復活のキリストに就て確證を與ふるのみならず、尙ほ活ける現在のキリストに關する喜びを與ふるのである『視よ、我は世の終り迄常に汝等と共に在るべし』とはイエスの告別の際に於ける約束なるが、其約束の通り今日敎會の中に、其聖名に列なれる群の中に、往く處として在さゞるなきを信せずには居られない。即ちイエスは信ずる者の中に宿りて昨日も、今日も、永久迄も變らぬ惠の泉となつてゐる。

第四十八講　此の福音書の目的　（約廿〇卅、卅一）

生命を與へんとの思召　此にヨハネは本福音書を著はした目的を記載し、本書全體に對する説明的序言を附してゐる。我等は本書の何處を讀んでもベーシ毎に、句節毎に靈の感化を蒙らないところはない。しかし乍ら今爰に何故に此の福音書が生れたかの理由をしることによりて一層福なることを感ずるのである。即ちヨハネは先づ我等にイエスが救主であることを確信せしめ、次にイエス・キリストは神の子であることを確信せしめ、そして斯る二重の確信は我等に永遠の生命を與ふることを信仰せしむるのが目的である。

錄された奇跡と錄されない奇跡と　『此の書に錄さゞる外なほ許多の奇跡をイエス弟子の前に行り』とあつてイエスの奇跡は多く錄されなかつたやうである。之を讀んで何といふ勿體ない事であらう、もつと澤山に神の不思議な奇跡が錄されて居たなら、どんなに福を感ずることだらうとは誰の心にも浮ぶ考へであらうと思はれる。しかし乍ら錄されない奇跡は錄されたものよりも、更に多くあつたに相違ない。偉人の生活にしても一生の出來

事を詳しく筆を以て錄して置くことは容易に出來ないことである。況して神の聖業に關する事柄を限られた一冊の書籍の中に錄し盡すといふことは不可能の事であると謂はねばならぬ。元より錄されうべき事は範圍が定まつて居る。そして範圍が定まつて居る事は制限された事のみである。由來人間は無限界に於て行はるゝ神秘奥妙なものを追及して居る。そして其無限界に於ける出來事を誰か能く有限界の我等に報道するであらうか。神の御業に於て、イエスの御業に於て及び神の爲の我等の事業に於て、古より今に至るまで、恒に『錄されざる許多の奇跡』若くは逸事、靈蹟の存することは當然の次第と謂ふべきである。又我等はヨハネの心を推測することは出來ないけれども、彼は我等が許多の奇跡の記錄を要求しないことを豫想せるやも計りがたきものありとも思惟せらるゝのである。之れよりもむしろイエスの內的生活即ち永遠の生命の秘義につきて我等に傳へんと欲したのではあるまいか。即ちヨハネは外部に顯はれた彼や此やの出來事を探究し、かつ之を記錄するよりは、イエスの愛に根ざしてゐる一切の言葉や、永遠の眞理及び生命に關してゐる總ての秘義などを繰返し〳〵我等に傳へたいと欲つた傾向の存することは、本書を味讀して認め

らるゝ事實である。

奇跡の目的 使徒ヨハネは或る目的のために擇んだ奇跡のみを其の福音書中に錄して居る。其目的は我等にイエスはキリスト即ち『メシヤ』で、そして神の子であることを信仰せしめんがためと、彼を信じて永遠の生命を有たしめんがためとである。即ちヨハネが此の福音書を傳へた所以は人類を唯一のイエスに歸依せしめ、イエスが救主であることを信仰せしめ、そして彼を信仰する者に永遠の生命を享有せしめんが爲めなのである。

四福音書の問題 『イエス』てふ名は四福音全體を貫ける共通問題である。イエスの名はベツレヘムの馬槽に呱々の聲をあげた時彼の母マリヤから呼ばれ、又工人としてナザレの茅屋に生活せる時、村人から呼ばれた名前である。我等が其名を呼稱する時、直にユダヤの會堂の有樣や、エルサレムの神殿の趣や、野の百合花の笑へる小山の傍に於て、唱へられた垂訓や、風靜かなる日、弟子達と共に一葉を湖上に泛べ給へる詩的光景や、種々な色彩の衣をつけて綠の芝生に座せる群衆を養ひ給うた愛の働や、或る筵に於て自己の頭の髮を以てイエスの足を拭いた殊勝な婦人の

態度や、閑寂な小山に於て通宵祈り給うた夕の光景や、古今の史上に双びなき全き愛と罪なき品性とを以て現はれ給うた唯一のイエスの生涯に、いたましくも、執拗に、頑迷に、苛酷に反抗し、迫害した祭司や、學者などの暴狀や、果ては最後の聖晩餐式に於ける一人の反逆者の狂態より暗愚なる暴徒の怒號や、尙ほゲッセマネ園に於ける聖なる苦痛、十字架、墳墓等の千態萬狀はひし〳〵と我等の眼前に顯はれて來る。實に肉をとれるイエスの生涯は實在の生涯であつた。人性は深さ、高さ、長さ、廣さ等を悉く具へて居た生涯であつた。古來何人もイエス以上に造られたものは無かつたのである。何人も彼の如く完美し、徹底せる生涯を送つたものは無かつたのである。

次に此の福音書の書かれた目的は、イエスが『キリスト』であることを我等に敎ふるためなのである。之を換言すれば、『油を注がれた王者』ユダヤの『約束された救主』なのである。彼は現在總ての力である如く過去一切の成就者である。化身は俄かに思ひついた思想や、第二の良策として案出された方法などではない。神が天地の基を据ゑた時より豫め企だてられた所の愛の結果である。由來我等はイスラエルの祖先だちと共に希望を一に

し、約束を一にしてゐる。即ち人類の墮落せる時、約束は與へられ、洪水の起れる時、地は新にせられ、そしてアブラハムと其子孫とを經てシナイの野に一層鮮かに實現せられ、詩の篇に於て彌々讃美せられ、やがて預言者の聲を通して聖き御聲は天地に響き亘つたのである。

かくてイエスはキリストなることを敎ふる目的をもてる本傳の記者は、此の人の子が約束の眞の本體なること、彼によりて世界の人類は悉く祝福せらるゝこと、彼はモーセよりも偉大なる預言者たりしこと、ダビデ王系に屬せる其幹なること、苦しめられ、迫められしも、而も彼自身の爲に斯くせられしに非ざること、高き玉座につける王者、メルキセデクの位につける永遠の祭司たることを確信せしめんが爲めに書いたのである。

最後に我等はイエスが『神の子』たることに想到しなければならぬのである。神の子たることを表現する點に於て毫も躊躇の色、疑惑の調なかりしイエスの要求に於て、其の意識に於て、根本的事實の存して居たことを認めずには居られないのである。イエスは直覺的に自己の神子たることを去り、其の無雙の關係につきて最も超絶せる權威を發揮して居

らるゝのである。かくて我等は『イエス』及び一層高き意義を含蓄する『キリスト』なる言詞の中に眞理の凝結するものあるを認めねばならぬのである。あゝガリラヤの大敎師、人類の大光明、仰げば彌よ高き我等の主イエス・キリストの御名は尊き哉と謂ふべきである。

信ずる者に生命あり　『誠に實に爾曹に告ん我言をきゝ我を遣はしゝ者を信ずる者は永生を有ちかつ審判に至らず死より生に遷れり』（約五〇二四）とあつて單にイエスを學ぶ者の上に生命なく、『信ずる者』に生命の與へらるゝことを敎へ、そして『信ずる』ことは彼に就て單に思索したり、追及したりすることにあらず、更に或る深き秘義の存することを思はねばならぬのである。

第四十九講　愛と奉仕（約廿一〇一五―一七）

塲合　時は記念にみち、懸念にみち、何等か決するところのあつた朝、湖上の清風徐ろに吹き來りて失望の中にも、やゝ清新の氣を回復してゐたシモン・ペテロや、トマスや、ナタナエルや、ゼベダイの二人の兄弟たちは曾てイエスが『汝等を人を漁どるものとなさん』と仰せられた所のテベリア湖の畔に立つて居た。即ち『此の後イエス又テベリヤの湖にて弟子たちに己れをあらはせり其現せること左の如し。シモン・ペテロとデドモと云へるトマス及びガラリヤのカナのナタナエルとゼベダイの子たち又他の二人の弟子共に在りき』とあつてイエスの弟子達の群がつて居た塲合に於て、イエス己を現はし、かつ終宵働きしも何の獲物もなかりし彼等に多くの獲物を與へて後、更にシモン・ペテロに向つて『ヨナの子シモンよ、爾は此等の者にまさりて我を愛するや』との問を三次發せられた。

三次び重ねて愛を要求す　イエスの仰せらるゝ前、使徒ペテロは既に三次も自己の言行（二十一〇三、七、十一）を現はしてゐる。かくてイエスは先づ『汝はこれらの者にまさり

て我を愛するや』と宣うた。此の言葉はイエスが『今夜汝等は我について礙かん』と仰せられた際、たとひ多くの人々が主について礙づくやうなことがあつても、私は決して左樣な事は致しませんと斷言したペテロの答に相通じて居るのである。當時ペテロは他の人々と共に逃れ、かつ三次もイエスを知らずといつて拒んだ事があつた。即ち『ペテロ、イエスの雞なかざる前なんぢ三次我を知ずといはんと云ひたまへる言を憶起し外に出て悲み哭り』(太二六〇七五)とあるやうな次第なるが故に、イエスは念を推して斯く問ひ給うたのである。此に於て過去に於て過失を重ねたペテロは敢て他の弟子たちにまさりて主を愛することを公言するの勇氣なく心潛かに怖ぢ乍ら『然り』とのみ答へてゐる。そこでイエスは單に『我が羔を牧へ』と仰せられたのである。此の言葉に人が人に己を愛せよと要求するやうな利己的な要求は顯はれずして、單に我が羔を牧へとて他人のための要求が顯はれてゐる。

二次びイエスは同一の問を繰返し給うた。しかし乍ら二次び目には『これらの者にまさりて』との言葉は除かれ、單に『ヨナの子シモンよ、我を愛するか』とある。そしてペテ

ロの答は前回と同一である。

かくて三次もイエスは同一の問を繰返し給うた。曾て三次イエスを拒んだペテロは今や三次愛に就ての試驗を受けてゐる。此に於てむしろ性急な、感情的なペテロは耐へられなくなつた。ペテロは斯る問は一次で澤山であるのに、三次も問はれて恐縮しつゝ、最早や愛に就ては質し下さるなといつたやうな調子で『主よ、ら、ざるところなし、我がなんぢを愛することは爾玄れり』と答へ奉つて居る。即ち爾は自分が爾を愛するや否やは篤に知悉し給ふ通りである。

斯くイエスが三次も同一の問を發し給ふに當り、ペテロは多少異なれる形式を以て三次びイエスに答へ奉つて居る。其處に傳道的意義と深き靈的興味とを含蓄してゐるのである。如上の物語の中に含まれてゐる眞理は先づ愛は奉仕のインスピレーションであり、次に奉仕は愛の完成であるとの事是れである。

奉仕のインスピレーションとしての愛　愛、即ちイエスに對する愛は、人類に對する愛の源泉であつて、謂はゞ奉仕の根本である。愛は聖き業をなす第一の要件で、又第二、第

三の要件である。我等は他人のために、人道のために『汝は我を愛するや』てふ我魂が繰返しつゝ我に向つて叫び居ることに氣づかるゝのである。實に愛は容易に實踐躬行せらるゝものではない。しかも我等が此の福音書に於て顯はされてゐるイエスの人格を眞に能く味讀するなら、之れから我等の心は鼓舞せらるゝのである。

『汝は我を愛するか』とは由來天地間に於ける大問題である。如上の問題は神及び自然界の大なる秘義である。そして人間唯一の希望で、主義である。愛は生命で、之に反する時は死である。愛の眞相は引力で、結合で、同情で、融和である。無意識なる自然界に於ても如上の理は認めらるゝ。我等の知る限りに於て、宇宙なる神の無限大の實驗室には愛の引力と融和との斷えない運動の存することを認むる。其處にいかなる微分子も單獨で存してゐないことが認めらるゝのである。宇宙に於ていづれの分子も『汝我を愛するか』との叫びを發してゐる。所詮科學が『親和力』と呼ぶ所のものを我等は之を『愛』と稱してゐるのである。

愛の完成としての奉仕　イエスの愛が我等の生活に在るとないとは、啻に我等の現狀を

告ぐる歷史であるのみならず、又我等の將來を語る豫言であると謂はねばならぬのである。イエスの愛は曾て使徒たちに大なる生涯をなさしめた秘義であつた。此の力が彼等の生涯に特別な行動を取らしめた魔力となつた。之が彼等に充分な動機を與へたと同時に正しき理想を與へた。そしてイエスの愛の存する所には早かれ、晩かれ、イエスの理想や、主義や、目的などは必ずや其徒の間に實現せらるゝに至るのである。そこで奉仕すること、貢献することは愛から自然に流れて來る結果である。故に愛のない所には奉仕も、貢献もないのである。愛の實現なるイエスの齎らせる王國に於て愛が其礎となり、そして其上に偉大なる愛の建築が現はれたのである。かくてイエスの愛を有する人はイエスの靈宮であつて、化身は再び茲に實現せられたとも謂はるゝのである。奉仕は愛の存する證據である。世界は之が實現せらるべき舞臺である。そして自ら抑遜する者が最も能く之を實現しうるのである。即ちイエスの愛は謙れるものにして、此愛のみが人間の同情性を鼓吹して、奉仕の途を全たからしむるのである。

ユダヤの『ラビ』の美はしき傳說の中に斯ういふモーセの物語がある。モーセがミデア

ンの地に於て義父エテロの許に羊牧者をして居た時、小羊が柵を離れて荒野に迷ひ込んだことがあつた。人間も、鳥も、動物も能く愛して居たモーセは小さな事にも又大なる事にも忠實であつたから、岩間やら、洞窟やら、諸方を尋ね廻はつて漸く彷徨うて居たところの小羊を探りあてた。其苦心は中々一方ではなかつたのである。斯樣にして彼が小羊を見出した時『小羊よ、お前は何が自分の爲になるのか知らない、私に全く信賴して居なさい、私はお前を必ず適當に導いてあげませう』と叫びながら自分の懷に入れたといふことである。そして神がモーセの柔和な心と彷徨へる羊の狀態をしろしめした時、モーセに向つて『汝は我が民イスラエルの牧者たるべし』との御聲をかけ給うたのである。

第五十講　爾は我に從へ　（約廿一〇廿一、二）

我が義務は自ら遂行すべきなり　此の句はペテロとイエス・キリストとの間に會話せられたものゝ最後の記錄である。此の會話は興味ふかき暗示を含んで居る。即ち之によりてイエスは我等に爲すべき義務の存することゝ、且つ之を遂行するには他人のいかんをまたず、自分がすゝんで獨り實行しなければならぬことを敎へ給うたのである。此の物語の外、ペテロとイエスとの間に、何等か會話せられたことありとするも、本傳の記者は、如上の言葉のみにて沈默を守り居るが故に、今爰に『我れもし彼が存へて我が來るを待を欲まば、なんぢに何のかゝはりあらんや、なんぢは我に從へ』といへる言詞にて本傳の記者の記錄は終りを告げて居るのである。

さてイエスは幾多の過失を犯し、遂に見苦しくも自分を否んだが、しかも尙何の點かに見込をつけて居給うたペテロと語れる間、少しの隔りを歩み給ひしが、ペテロはふりかへりて、ヨハネが從がへるを見て『主よ斯人いかに』と發言したのである。此の塲所は難解

のところなるが、恐らく斯人も亦榮えある殉教の生涯を遂ぐるでせうかとの謂であらうと思はれる。ペテロが斯かる言葉を發せる理由として、或はヨハネに對する嫉妬や、不平から起つたやうに解せられざるに非ざるも、しかし乍ら斯樣に解してはペテロの心事を餘り忖度し過ぐる弊なしとせざるのである。さあれ、ペテロがイエスから三次びも『汝は愛するか』と問はれた言葉は心に徹して居たに相違ないから、イエスに從へるヨハネの姿を見るや、一種の刺擊となつて愛と悲しみとにて動いて居たペテロは、斯く自分の感情を洩らしたのであらうと思はれる。しかし乍らペテロの言は恐らくヨハネの運命に關する心配や、懸念から起つたものと推測するのが穩當な見解であらう。

我もし彼が存て我が來るを待を欲まば 此に含まれてゐる第一の思想は、我等に他人の爲になすべき義務の存すること丶、第二の思想は之を遂行するには我等自身の意志によらねばならぬこと丶の事である。今や心配相な顏付をしてゐるペテロに向つてイエスはヨハネの行くべき途は汝の行くべき途とは異なつてゐる。即ち『爾に何のか丶はりあらんや』といへる言葉によりてイエスは力を込めて、其の異なつてゐることを敎へ給うたのである。

尙ほ之を換言すれば、汝は汝の途に立ち、彼は彼の途に立ち、汝は汝の盡すべき使命を果せ、彼は彼の盡すべき使命があるから、人の將來まで憂ふるに及ばぬとの意である。そこで一は主の爲に働き、他は主の來るをまつ。一は世界に福音を宣傳して殉敎者の位に就き、他は孤嶋に客となりて見えざる主の再現をまち、そしてやがて高齡に達して永遠の住家に歸る。固より主に從ふもの丶運命や、歸着點などはそれ〴〵自然に異なつてゐて一樣でないとの意義になるのである。

因に記す。エペソに於ける使徒ヨハネにつきて一般に承諾されてゐる初代敎會の傳說に依れば、ゼベダイの子、ヨハネは使徒パウロの殉敎後（紀元六七）、恐らくエルサレム落城後（同七〇）、同所を去りてエペソに移り、此處に廿五年間餘駐在して、小亞細亞地方の諸敎會を管理し、第四福音書を初め、ヨハネ第一書、二書、三書及び默示錄をも公にし、ッラジャン（紀元一〇〇頃）の治世中、遂に自然の死に就いたと謂はれて居るのである。

爾に何のか丶はりあらんや 此句に於て我等は他人の運命に關して彼れ、此れ心配したり、好奇心に驅られて想像を描いたり、樣々な斷定などを下すやうなことをしてはならぬ

ことを誡めらるゝ。ペテロの心配は世々のクリスチアンが陷つてゐる弊竇たる神事に關する不謹愼な妄斷や、聖業に對する暗愚や、庶般の出來事についての輕佻な好奇心などを豫想して居る。主の訓誡は斯る不虔な、無主義な、無精神な態度に對して下されたのである。主の要し給ふ所のものは未來に關する無益な空想や、極てしもない想像ではなく、自己に與へられてゐる位置に立つて現實的に自分の使命を全ふすることなのである。之に類した訓誡は路加の十三章中にも在る。即ちピラトがガリラヤ人の血を其供物にまぜし事をイエスに告ぐる者ありしに際し『なんぢら此のガリラヤ人は是の如く害されし故に凡のガリラヤ人よりも過りて罪ある者と意ふや。然らず、なんぢら悔改めずば皆同じく亡さるべし。シロアムの塔たふれて壓死されし十八人はエルサレムに住める凡の人々よりもまさりて罪ある者と意ふや』と仰せられ、再び斯やうな益のないことに就ては『我に告ぐるな』といふ態度が示されてゐる例もある。

しかし乍ら主は決して適當な研究の精神や希望などを制し給うた所以ではない。正當な好奇心は知識の母であり、源泉である。只だ所謂る一種の好奇心や、一時の感情的態度な

どを戒め給ふ次第なのである。

我に從へとは心から服從することなり　外面や、形式や、虛禮的態度などを以て靈と眞とを好み給ふ主なるイエスの心と合體融和することは出來ないのである。靈と眞とに充ち給ふイエスの心と符合するには靈と眞とを要する。イエスが弟子達を招き給うた秘義は壓迫威嚇に由れるにあらずして、愛の力を以て引着し給うたのである。人は先づイエスに心を捧ぐるにあらざれば、イエスの歸依者たることは出來ないのである。即ち心を以て心に服し、靈を以て靈に接することが眞の服從である。『我れ神に感謝す、なんぢらは素と罪の僕たりしかど、今は既に授けられしところの敎の範に心より服ひて、罪よりゆるされ義の僕となればなり』(羅六〇十七、八)とあつてパウロも心から主及び其の敎にしたがふべきことを敎へてゐる。其の服從たるや律法に强いられ、審判に迫まられて敢てなすに非ず、我等を動かす動力たる神の愛に引着けられてなすのである。實にイエス自身が我等の心の磁石たらねばならぬのである。

又信仰を以て從ふことなり　主に從ふものは數々見えざる世界や、未踏の境地へ進み入

ることのあるものである。信仰は水の上を行くが如き場合もある。我等は神の御保護と攝理なくして決して其上を行くことは出來ない。しかし乍ら曾てペテロが『主よもし爾ならば我に命じ水をふみてなんぢの所に至らしめよ』（太十四〇二八、九）と叫んだとき、『來れ』と宣うたイエスは、今爰に『汝我に從へ』と仰せられたのである。由來信仰は勇氣を要する。信仰なき時、我等は一歩も前に踏み出すことは出來ない。そして信仰の飛び石は神の約束を信ずることである。『信仰は聞くよりいで、聞くところは神の道に由れるなり』（羅十〇十七）とある如く、神の道に由り、其約束を信ずることが必要なのである。

又意志を以て從ふことなり　信仰は意志を以て信じなければならぬ。然らざれば信仰は其實を齎らさないのである。あらゆる眞の從順は外の行爲から來るものではなくして內の活動から起るものである。即ち意志から起るものである。我等イエスに從はんことを欲ふものは、イエスの意志を我等の意志となして之を實行することに努めねばならぬのである。我等は外の行爲に於て從順なる前に、內心に於て從順なるものとなるを要するのである。單に行爲のみを以て行爲を遂行せんとする時は、其目的を達すること難きも、意志を以て

行爲を成し遂げんとする場合には、常に之を全ふすることが出來るのである。

又神の攝理に信賴することなり　由來人生には不可解の問題が起つて來る。我等は曾てヨブと其友人たちの間に宇宙問題、人生問題につきて樣々に論議せられた時、所詮其解決を見る能はざるに當り、大風の中よりヨブに向つてエホバの聲があつたことを知る。即ち『無智の言詞をもて道を暗からしむる此者は誰ぞや』、『地の基を我が置たりし時、なんぢは何處にありしや、汝もし穎悟あらば言へ』『また鴉の子神にむかひて呼はり食物なくして徘徊る時、鴉に餌を與ふる者は誰ぞや』（百三八〇二、四、四一）とあるに對し、ヨブは『我れ知る爾は一切の事をなすを得たまう、又いかなる意志にても成すあたはざるなし』（百四二〇二）と答へて神意に任せて居る。所謂る『我に從へ』とはイエスの御聲である。實に彼に從ふものゝ途に攝理あり。其攝理に深き聖旨あり。其聖旨に我等の全心を擧げて信賴し、歸服し、そして一致して行く生涯が、乃ち我等の理想とならねばならぬのである。私は此の講解を了るに當りテニソンの信仰を以て結びたいと思ふ。

信仰の祈り

テニソン

神の強大なる子、不朽の愛よ、
　我等其聖顔を拜し奉つらざるとも
信仰によりて獨り信仰に由て懷かん哉、
　我等が立證し得ざる所を信じつゝ。
爾は光と蔭との軌道なり、
　爾は人と獸との生命を造り、
死を造り而して見よ爾の足は
　爾の造りし頭の上にあり。
爾は塵埃の中に我等を捨ておかざるべし、
　何故に爾は人を造りしかを知らず、
人は死すべく造られしに非ざるなり、

　爾は人を造れり、爾は義しき神なり、
　爾は人にして又た神なり。
爾は最も高く且つ最も聖き人格を有す
　我等の意志は我等の者たるも其の理を知らず、
我等の意志は爾の者たらしむべき我等の意志也。
我等の小さなる學問には其日あり、
　其日あるも跡をたつの時あるべし、
吾等の推理は爾の只だ片々たる光のみ、
　オー主よ爾は學問推理よりも更に大也。
我等は唯だ信仰のみありて知る能はず、
　我等の智力は形的事物を觀るにすぎず、

而も我等は其の爾より來れるを信ず、
知識は暗中の光りなり、
乞ふ之を增進せしめよ。

知識をして彌よ益す發達せしめよ、
されど敬虔の念をして更に多からしめよ、
其の心意と靈魂とは並んで調和しつゝ。
從來の如く音樂を作り得んがために。

此等漫散放浪なる叫び聲、
徒勞に過ごせし靑年の惑を恕め、
眞理を逸失せし我等を赦し、
而して爾の智慧によりて我等を賢からしめよ。

大正五年十二月二十五日印刷
大正五年十二月二十八日發行

定價金五十錢

著者　倉長巍
東京市京橋區明石町八番地
基督教興文協會代表者
エス、エチ、ウエンライト

發行者　村岡平吉
櫻瀨市太田町五丁目八十七番地

印刷者　村岡平吉
東京市京橋區銀座四丁目一番地

印刷所　福音印刷株式會社

發行所　日本基督教興文協會

不許複製

發賣所　教文館・警醒社・丸善書店・福音書店
東京市京橋區明石町八番地
基督教書類會社・岩波書店

Z 1181

終